

## 死者と生者の間に⑤

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

葬送の儀礼そのものが商売となり、商品となってきた現在では、死者もモノ化されつつある、生と死とは不可分であるはずなのに、死は生から離されてしまいつつあるという指摘があることは前回紹介しました。それは、生活環境や社会構造の変化などによって、どうしようもないことなのかもしれません。それでもなお、死者を送る儀礼は、「死」が取り返しのきかないものであるということを経験した人々に認識させることができます。同時に遺された人々はそうした儀礼を通して、結果的に日常生活に戻りやすくなってもいます。

## 「死者」儀礼と遺された人々

『「お墓」の誕生—死者祭祀の民俗誌』（岩波新書、2006）を著した岩田重則氏は、山梨県の山村で聞いた話をいくつか紹介しています。

家から外に出ている人が亡くなる時屋根が鳴るという。この家から嫁に出たヨシコおばあさん（仮名）が亡くなる時、家の屋根が鳴った。トタン屋根に石がぶつかるような、バラバラと鳴る音がした。あとから知ったのは、ちょうどその時間帯が危篤状態であったという。「ヨシコおばあさんがお別れにきた」とみなで話しあったものであった。（pp.39～40）

このような“いまわのきわ”に靈魂が肉体から離れていくという話は、いくつも伝えられてきました（柳田国男『遠野物語』、松谷みよ子『現代民話考』など。また、「臨死体験」としても語られることもある）。岩田氏は、生から死へと移る時、靈魂は肉体から離れるという“幻想”がこの社会にはありそうだと述べています。つまり、生から死への移行期には靈魂は肉体から離脱しやすいと思われていた、日本社会では、肉体と靈魂が分離するという観念が存在している（p.42）と指摘し、この観念が、肉体と靈魂との分離を促進する役割を持つのか、あるいは避けるべき観念なのかと問いかけます。

民俗学の定説では、この課題は前者を軸に説明されてきた。霊肉分離が期待され、それが完成させられるべく葬送儀礼が行われていくものであるという。新しい死者は荒々（新々）しいケガレた状態にある。そのために、葬儀だけではなく、初七日……最終年忌を行うことにより、死者の靈魂は完全にキヨメられ祖霊になるという。こうした定説を形づくった柳田国男『先祖の話』は、これについて、「一定の年月を過ぎると、祖霊は個性を棄て、融合して一体になるもの」であり、やがて、その祖霊は新しい肉体に入り込み生まれかわるものであるとしている。彼はそれを「魂の若返り」といつている。（p.43）

つまり、「肉体は借り物、祖霊としての靈魂が、くりかえし肉体を遍歴していくというわけである」（p.43）とまとめています。祖霊が生まれかわるには、靈魂の肉体からの分離が必要ですから、それを促すために儀礼があるということになります。

一方、長年にわたる岩田氏自身の現地調査（実際に行われてきた葬送儀礼の内容）から、「確かに、霊肉分離の観念はみられるのだが、葬送儀礼には、むしろそうならないようにするための志向が強い。靈魂と肉体との分離がおこるがゆえに、靈魂

一致をめざすような儀礼が行われている」（p.48）と、逆の結論が導き出されました。岩田氏は、たとえば、まず「魔物・猫がまたぐのを防ぐ」ために遺体は刃物を抱くこと、死装束を着ること、出棺の前に家の入口で火を焚く、茶碗を割るなどの行為が行われる、葬列が3周または3周半するなどの事例を挙げています。これらは、遺体や“死霊”が忌避されていることを示し、また、（葬儀における回転は、）遺体が墓へと移行する境界的空間や時間において、「遺体にともなうべき死霊を遊離させず、遺体へと附着させていることを再確認する儀礼であると考えたい」（p.60）と述べています。そして、墓までの移動途中で遺体とともにあるべき死霊が分離してしまうことは歓迎されず、死霊は遺体に附いていなければならなかったし、遺体埋葬後も同様の状態が求められたのだ（p.66）とします。

さらに、お墓の意義について、その設営や様態の観察を通じ、「葬儀全般を通じて見たとき、そこには、僧侶が関与する部分と、そうではない部分とがあるが、遺体埋葬それじたいと墓上施設の設営に対しては、僧侶が関与することはなかった」（p.88）と結論づけています。これはいわば、仏教が葬送儀礼を通して民間に浸透していったなか（江戸時代の宗教政策については「先祖祭祀の政治性」として検討されている）で、それに影響を受けていない部分であって、その後、お墓が石塔になり、戒名が刻まれるようになると、このような習俗は仏教的な要素と併存してきたと考えられると言います。つまり、先祖代々の墓というような形をとるようにもなって、「葬式仏教」的先祖祭祀が、仏教以前の死霊祭祀とは互いに質的に独立したまま、排除することなく共存している（p.90）とまとめています。

いずれにせよ、人間が死ぬと「靈魂」が「肉体」から分離していくと考えられていたことは確かなようです。死者の霊を怖れることと、その靈魂が「カミ」あるいは「先祖」となるということは、どちらも排除されることのない、日本人の心性となっているのでしょうか。「私のお墓の前で/泣かないでください/そこに私はいません/眠ってなんかいません/千の風に/千の風になって/あの大きな空を吹きわたっています」で始まる『千の風になって』が近年話題となりました。その心象風景や人々に受け入れられた背景に思いを巡らせてみると、今の時代にあって求められている葬送や死者との関係が浮かんできそうです。

ところで、死あるいは死者は「黒不浄（死の穢れ）」として「ケガレ」の一つとして認識されてきました。「清め塩」（現在では用いられていない地域や教派も多い）が端的に表わしているように、それは死者だけでなく、それにかかわった人々にも及ぶものと考えられてきました。ケガレはしばしば「ケ（気）ガレ（枯れ）」と説明されますが、もし、そのように考えられるとするなら、死によって“元気がなくなってしまった”遺族（と関係者）が、元の状態を回復するために葬儀は必要であるといえましょう。波平恵美子氏は「死者の遺族を中心にして行なう儀礼の数々が、いずれもケガレを祓い去り、取り除こうとする意味を持つ」「死に伴う儀礼はその特異な状況（死の発生によって引き起こされたケガレ）を元の状態に戻すため」（『ケガレ』講談社学術文庫、2009、p.17）と述べています。